俺【我愛羅】ってんの、宜しくね☆

八又ノ大蛇

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全く自分に関することが思い出せない男が我愛君に成り変わった。でも他の事は覚えておりここがＮＡＲＵＴＯ　の世界であることに気づき、男は逆転王道主人公コースを目指ーーーさない。

暗部？ーー良いじゃん。殺されそうになったんだら殺して何が悪い。

尾獣？ーー守鶴さんは俺にとって唯一の話し相手。

父様？ーー知らんがな。

諦め投げやり上等！そんな主人公が歩むそれなり忍者ライフ！

目次

一塵～成り変わりは我愛羅～ ―― 1
二塵～班決めは先生の匙加減～ ―― 7
三塵～お月様は砂煙に隠れる～ ―― 13
四塵～休日、ボッチは実践訓練中～ ―― 19
五塵～守鶴心、我知らず～ ―― 25

一塵～成り変わりは我愛羅～

薄ぼんやりしたした視界が晴れると俺は、な、な、な、なんと！ＮＡＲＵＴＯの我愛羅くんに成っていたのです！まぁ、驚いた驚いた。

最初はえっ？ナニコレ状態でした。前世では平凡な……何だっけ？ぼやっとしてハッキリとは思い出せないけど、多分男だったと思う。うん、駄目だどんな仕事についてたのか何歳だったのかも分からない。

ただ、こんな砂に囲まれた砂漠の中に築いたよう場所は前世でも無かった。知らないだけかもしれないが、見たことが無かった。並び立つ高層ビル、土のない補整された道路、少なくともこんな砂だらけの所には住んでいなかった。

そして何より人が屋根の上をピョンピョン飛び回る光景は絶体見たことない。初めて見たときはどんな身体能力してんだよ、って思ったね。でもやってみれば何故か案外普通に出来る自分に驚いた。あと何より自分の容姿に驚いた。わぁ、驚いてばっかりだぁ。

でも仕方ないよね。だって我愛羅くんですよ？あの初期グレグレ反抗期感が半端なかった我愛羅くんですよ？そりゃあ、驚きますわ。

もう驚きすぎて勢い余って砂で壁に穴開けちゃいました。直ぐに監視役の忍が飛んできたよ。ゴメンね。

でもさぁ、冷静になって思うんだけど俺どうしよっか？

ぼくはがあらくん、ことし6さいになりました。たまにコワイ～”あんぶ”のひとがぼくを殺しにきます。

夜叉丸の死亡から感情を抑えきらないで暴走しちゃって父様の命令を請けた暗部に暗殺されかけています。暗部ってのは”暗殺戦術特殊部隊”のことね。主に汚れ仕事を請け負う里の裏方で精鋭揃い。そんな人らに我愛羅くん狙われている訳よ。

ねぇ、どうすりゃいいわけ？記憶が戻ったのが処分判断された後6歳。処分判断される前なら道は色々あっただろうけど、された後って

どうすればいいの。無理じゃん、ベリベリハードコース直行じゃん。そっから逆転王道主人公コースには流石にナルトくんぐらいのダイヤモンドのメンタルがないと無理だって。

俺？あるわけないないじゃん。そもそも暗殺にきた暗殺の方々をコロコロしちゃってなんか、もうどうでもいっかなぁ。になっている。殺らねば殺られるの状態で捕獲するなんって甘ったるい選択肢は皆無。練乳と蜂蜜入りのミルクに砂糖を入れてもまだ足りないぐらい甘い。

何で殺されかけてっんのに殺す相手の心配しないといけないの？ぼくわからない～。

原作の方でも殺りにきた相手を我愛羅くんバンバン殺していたみたいだし問題なくねぇ？

それとさ、ご都合設定なんだろうけど……暗部殺せるぐらいの我愛羅くんがなんで、中忍試験でたかが下忍に苦戦させられているの？あれずっと謎だったんだけど。

下忍が暗部より強かったと仮定しても可笑しいよ。原作の描写じゃ我愛羅くん複数対一人で勝ちを納めているんだから、下忍一人この場合はサスケね、に追い込まれるのは可笑しいじゃん？

……まぁ、いいやぁ。もう考えるの面倒だ。「人間は考える葦である」と偉人が言ったらしいが知るか。時には思考の停滞もとい「現実逃避」も必要だろう。

そんは訳で……

『守鶴さん暇です』

『……』

『守鶴さん～』

『……』

『守鶴たんー』

『うるせぇよ!!』

『寝てんだよ、邪魔すんな!!』と怒鳴る我愛羅くんに封印された守鶴さん。原作だと疎ましい存在しているけど友達のいないないの我愛羅くんには唯一の話し相手。彼？のせいで我愛羅くんは不眠病に

なってたみたいで寝れない為にできた隈が凄い。寝た瞬間に乗っとるぞで恐怖で寝れない我愛羅くん。
ヤバイねぇー。ん？どうしたって？寝ましたよ。
二日ぐらい頑張ってみたけど無理。マジ眠い。もう暴走してもいいかなぁの自棄で寝てやると、何故か乗っ取られることは無かった。これには俺クエスチョンマーク。
それから俺的に考えた答えは、寝ると乗っ取られるではなく寝れないという不安や恐怖からフラつく精神の隙間に入り込み乗っとるのではないかと思う。我愛羅くんなんか精神不安定だったし。可能性がないわけではないと思う。
まぁ、正確にはわかんないけど。でも寝れるならいっか、って感じ。何でかこの体寝ても寝ても眠気が消えてくれない。隙あらばお寝んね。あれかね、今まで寝れなかった分のツケが回ってきた的な？
俺自身寝ることが嫌いではなく大好きだし、遊べる友達もいない。寝る子は育つ、いいじゃんドンドン寝よう。
でもさぁ、寝過ぎても暇。
『守鶴さぁ～ん、暇ぁ～』
『知るか！』
『「しりとり」しようよ～』
『一人でやってろ！俺様は寝てぇの！』
『守鶴さんのケチ』
『第一人柱力が俺様に気軽に話しかけんじゃねぇ！俺様は人間が大嫌いなんだよ！』
『じぁ、俺からね。「しりとり」のりだから「りんご」』
『勝手に始めんじゃねぇーー!!』
まったく守鶴さんはツンツンだなぁ。でもなんだかんだ言いながらしりとり暇潰しに付き合ってくれる守鶴さん優しい～！多分暇なんだろうね。だって彼寝ること以外することないだろうし。そりゃ外に出たいわな。
俺は普段勉強とか術の修行とかしてる。勉強結構ムズいけど他にすることないからしてると本来アカデミーで教わること終わっちゃ

た。
元から我愛羅くん頭良かったのもあると思う、だって臨の書にサクラまではいかないもサスケよりは良かったと書いてあったし。覚えるの早いし理解も早いよこの頭。
するとだいたい術の修行になるだけど、正直これは暗部の先生方と殺りあった方が熟練度が上がると思う。ほらゲームの敵を倒したら経験値ゲット的な？想像するより現物と殺った方が早い。
なのでやることが幻術か体術にシフトチェンジ。幻術と言えば打倒うちは・サスケ、体術ならロック・リーを目指しております。
幻術はまぁまぁだけど我愛羅くん体術駄目だね。成長途中なのもあるけど根本的に力が弱い、臨の書にも唯一女と同じぐらいと書かれていたよ。なので回避に主点を置くことにした。下手な鉄砲数打ちゃ当たるじゃないけど、攻撃は砂でやった方が何倍も強い。防御も砂でなので棒立ちになる。
これ当たらなければカッコいいけど、油断して当たるとめちゃカッコ悪い。
なので体術頑張って逝こうー！あっ、間違えた。
頑張って行こうー！
『トカゲ』
『ゲ……激怒プンプン丸』
『……はぁ!?何それ！』

ぼくはがあらくん、ぼくはきょうは”あかでみー”にはいりますー。
はいっ！とやって参りました！

右手に見えますは子供たちの学舎砂隠れのアカデミーになります。子供が少ない砂隠れでありますがここにはたくさんの子供達がおり和気あいあいと和やかな雰囲気に包まれております。そんな中にいます私こと我愛羅はとてもとても居心地が悪いのですよ。はい。

「……」

意味わかんねぇー、ナニコレふざけんなし。俺から分かりやすく一定の距離を保つの止めろ。マジで傷つくから。俺泣いちゃうよ?

チラッと近くの（三メートル離れた）子に目を向けると顔を青ざめて他の子の所に走っていった。……。いいもん……俺には守鶴たんがいるもん。一人じゃないもん。おい、あれボッチ乙とか聞こえたような……いや、俺に話しかけてくれるヤツはいない。

いいんだよ?そう言っても。だからそんなに離れないで、俺のガラスのハートが粉々に粉砕するから。

『もう一度融解して直ぐに再生するだろ』

『しないもん、砕けたまたまただもん!』

『あぁ、それで回りを傷つけるんだな』

『ちゃんとチリトリであつめるもん!』

『一人でな』

『そう言うのヤメテ!私のライフはもうゼロよ!』

一人ちゃうもん、守鶴たんいるもん。『俺様を含むのは止めろ』とかぼく聞こえないもん。

はい、と言うわけで俺が長々と守鶴さん脳内会話をしていると風影様の話は終わりました。本当父様鬼畜いよね。俺の方を睨んでから退場していったよ。熱い目線とはこの事だろうか?熱過ぎて逆に背中がヒヤッとしたよ。

眠気眼で話聞いてたから?それとも昨日暗部の方々を三途の川を渡る船に乗せたせいだろうか?多分後者かな?

まぁいいや、今日から俺の忍者アカデミーの開幕だからね。人間第一印象が肝心ここは完璧な自己紹介で皆の目線を集めてクラス一位……は百パーセント無理だから友達一人は作りたい!

頑張るぞ〜!

「我愛羅だ……」
「はい、じゃあ次の人」
はい、コミュ症乙自分。
分かってたよ。分かってたんだ。そうだよ、無口なんだよ。必要最低限の事しか我愛羅くん喋らないんだよ。砂とか出来のいい頭脳を受け継いだら無口も受け継ぐのね。
要らん！
黒板前に立った瞬間、頭の中に何回も繰り返した紹介文が真っ白の生地に早変わり。もう名前言うのが精一杯です。えっ、何で？我愛羅くん別に恥ずかしがりやという訳ではなかったと思うけど……。消去法に従って導き出す答えはーー俺か……。
俺って緊張に弱かったんだね、初めて知ったよ。普段誰とも喋らないから全然知らなかった。
無口プラス緊張に弱いこれが掛け合った結果、名前だけ。
「……帰りたい……」
机にうつ伏せになり静かに声が口から漏れた。それとついでとばかりに目から水が溢れそうになった。

二塵～班決めは先生の匙加減～

一日目はクラスに集まって自己紹介をして終わった。して今日から本格的に授業開始である。さぁ、ここでアカデミーの入学条件を確認してみよう！

一、里を愛し、その平和と繁栄に尽力する志のある者であること

二、不撓不屈の精神を有し、たゆまぬ努力と鍛練を行う者であること

三、心身ともに健全であること。以上三つをもって入学条件とする。

どこの軍人学校だよ！ってツッコミたい。

これを真にクリアしている者がいるならソイツもう学校通う必要があるのだろうか？自身で勝手に強くなる気がする。でもまぁ、創立されたのが戦乱の世で戦力確保と教養が求められればこうなるような。でもさ、厳しすぎない？それとも文が固くてそんな印象を受けるだろうか？

まぁいいか……拙者にも不撓不屈のダイヤモンドメンタルが欲しいでござる。それがあれば、この愉快な笑い声が少しはましに聞こえるでござろう。

「あっ、今コッチ見なかった……？」

「えっ、ヤダ怖い」

「なんでここにいるんだろう？」

「しー、……もし聞こえたら殺されちゃうわよ」

「もっと、向こうに行こう……」

やーだ、やーだ、ぼくお家に帰りたいー。聞こえとるわ、耳いいんだよ。そういう話はもっと隅でやるか本人のいない所でしてくれ。心にグサグサ杭が刺さる。

「……はぁ」

自然とため息が出る。今日から学校だと言うのに何故初日からこんなにも憂鬱な気分にならねばならないのだろう。人の楽しそうな

笑い声が俺には不協和音に聞こえる。
ヘェーイ！今日のＢＧＭは「クラスメイトの笑い声」だ！ってか？
そんなクソみたいな曲がラジオから流れた日には俺は機械ごと粉々に潰して火葬してやるわ。ナルトならどうするんだろう？……駄目だ駄目だ。「サボる」の文字が脳内を埋め尽くす。
しかし彼は本当どうしていたんだろ？キツくないか？俺は既に泣きたいです。女子のヒソヒソ話の効果は確実に俺を蝕んでいる。ねぇ？君達もっとボリューム下げてくんないかね？
「はい、皆席についてー」
チャイムが鳴り入ってくる教師の先生がそう言うと皆席につき出す。おぉ、神よ！ただ仕事をしただけだろうけど、俺には地獄に仏に見えるよ！
しかし、そんな俺のピュアな想いは先生の次の発言で玉砕するのだ。
「一時間目は交流を深めるため”５人組”の班を作って活動してもらうからな」
”５人組”……５……人組……。
その言葉は言ってはいけない呪文だ。子供の少ない砂隠れのアカデミーのクラス人数は二十四人。このことが、どういうことか分かるか諸君。
一つは四人組の班が出来ると言うことだ。
まず、仲の良い活発的な集団ができ、顔見知りらが集団を作る、そして友達伝いで集団が構成され、知り合いがいないものは適当に回りのやつらと集団になる。
そうすると、残るのは人数の都合上比較的立場の弱いハブられたヤツ、知り合いもおらず誰も声をかけてくれなかったヤツ、言動や行動に問題があるヤツ、そして知り合いもおらず関わりたくないと思われる”俺”である。
オワッタ。
「……そっ、その……よろしくお願いします……」
「……なんで僕が……こんな班に」

「あぁ？聞こえねえなぁ？声ちぃせんだよ！」
「……」
小柄で気弱そうな青髪の少女、眼鏡をかけた頭固そうな黒髪少年、声と身長もデカイ暴力そうな茶髪の少年。そこに里の嫌われもの赤髪少年我愛羅くん。
ねぇ！この班駄目だと誰が見ても分かるんだけど！
ってか、俺少女にすら身長負けてねぇーか!?どんだけチビなんだよ！
「おっ、出来たな。じゃあ演習場に行くぞ」
なんでも、個々の実力を見るために班対向で模擬戦だと。無理無理だって、一人かけている班は対向する班を一人減らすと言っても無理だって。この班絶対連携プレーとか出来ないよ。作戦たてても失敗する未来しか想像できない。
いや、別に自惚れじゃないけど俺一人なら勝つこと自体は容易いと思う。なんたって皆が友達と遊んでいる時間全て勉強や術の修行をしてたからね我愛羅くん。それぐらいしかやることないし。必然的に強くなる。
砂のコントロール出来ないと感情が苛立っただけで人グッチョンしちゃうからね。
ただなぁ……いきなり前に出たりされると味方だろうと関係なく攻撃してしまうかもしれない。そうなると俺の学校の居場所は消え失せるだろう。
でも最近体術を始めたばかりでとてもじゃないが実践で使えるものではない。なので砂で攻撃するしか方法が今のところないのだ。

せんせーのせつめいをきいて”もぎせん”がはじまりました。ぼくのはんはさいごなのでいまはまっています。

うぉあぁぁぁぁ!!どうしよう!他の班はそれぞれ意見を言いながら作戦を練っているけど、俺の班は無言!誰一人として喋らない!気まずいの一言である。
不幸中の幸だろか、順番は最後なので考える時間はある。けど、だれも話さない。
勇気を出して俺から話かけても良いが、誰も相手にしてくれないのが火を見るより明らかだ。更にこの沈黙が強化されるだろう。
「あ、あの……どうしますか?」
おぉ!大人しそうな少女が発言した。凄いぞ!この痛い雰囲気で話せるのは。これに乗らない手はないな。
「そうですね、とにかく先ずは自己紹介をするのが最善だと思われます」
「うん、そうだね」
眼鏡よくやった!この二人は知的な感じたな。
「じゃあ、僕から。僕は【キルルク】忍術の知識はそれなりにあると自負しています。忍術は土が少し使えます」
「わ、私は【シズサ】傷の手当てが得意……かな?ごめんない、体術も忍術も苦手なの……」
忍術の知識ってどのぐらいなんだろう?子供の知識だからそんなに期待しない方がいいな。傷の手当ては……うん、大事だよね。俺殆どの攻撃は砂が防いでくれるから傷をおったこと無いけど。あっ、自分で傷つけたのはノーカンね。
「へっ、大したことねぇなぁ!俺は【ゴウゲン】だ!体術は親父に鍛えてもらったからな!忍術は雷が使える!お前ら俺に従えよ!」
負ける筈ねぇー!感が半端ないゴウゲン。うん、自信はあった方が良いよね。ただ威圧的な人は俺苦手だなぁ。いやまぁ、命令してくれのは責任を負わなくて済むから楽でいいけど無茶な命令は止めて欲しく思う。
ん、最後は俺か。
「【我愛羅】だ……砂を使う」
どうよ!頑張ったよ!名前だけじゃなくちゃんと他の事も言えた

！なのに何で皆俺の方を見てるの？終わったよ？注目されるの嫌なんだけど。
なに、そんなに俺が喋ったら可笑しいの？
「へ、へっん！なんだ化け物だって聞いていたがこんなチビかよ！」
「……あぁ？」
「フッン！お前みたいなチビが睨んだって怖かねぇだよ！」
なんだコイツ……。分かりやすく頭に乗ってる俺の嫌いなタイプの餓鬼だ。チビって二回も言いやがった。許すマジ刑だ。俺は確かにチビだろう、それは認める。だが、自分で認めていても他人にそう言われるのは腹が立つ。
しかし、俺はそんな挑発に乗るほど短気ではないのだよ、ゴウゲン少年。
「……何が言いたい」
「お前より先に相手の班をやっつけてやる！」
「……そうか」
「俺が勝ったらお前は俺の下だからな！」
……意味がわかんねぇだが。そもそも、これ班での模擬戦だろ？なんでチーム同士で争わにゃいかんのだ。馬鹿か？脳筋か？
それと、自分が勝つこと前提で話されるのはなんだかムカつく。
「……俺が勝ったらどうなる？」
「あぁ？ねぇよ！俺が勝つんだ！けど、そうだな！俺が万が一にでも負けたらお前の命令聞いてやる！だから、俺が勝ったらお前俺の命令に従えよ！」
無茶苦茶だ。脳にウジ虫でも沸いてっんじゃねぇか、この餓鬼。俺がその提案に乗る理由が全く無いのだが。命令したい事もないし。
『友達になって、て命令すりゃあいいんじゃねぇーか？』
『はっ……？』
『なーんてっ』
『……そ、そうか！そうだな！』
『えっ？』
『いいな！それ！』

友達！こんな所でその可能性に出会うとは！アカデミーに来たときは早々に帰りたいと思っていたが、幸運だ！

ほら、いつもは仮面のように殆ど動かない顔の筋肉が嬉しそうに自然に持ち上がる。きっと今俺はいい笑顔をしているだろう。

「……いいぞ、受けてやる」

「は、はっ！上等だ！」

あぁ！楽しみでしかたない！

こんな機会はそう無いだろう。速攻で有無を言わさず決めてやろう！

三塵～お月様は砂煙に隠れる～

はい、俺達の班に順番が回って参りました。
相手の班は前に三人後ろに一人の配置で、こちらは前二人後ろ二人だ。まぁ、こっちは配置とかでなくただ単純に班活動だと言うのにチーム内で競いあう馬鹿な二人が前に出ただけだけどね。
「キルルクくん……これで大丈夫かなぁ……？」
「大丈夫なわけないでしょう。……でも貴女あの二人に反論出来るとおもいますか？」
「うっぅ……ごめんなさい」
ゴメン！本当ゴメン！そうだよね！
馬鹿な二人ことゴウゲン少年と私我愛羅でございます。本当俺の馬鹿！たかがガキの挑発に乗っちゃうなんって！二人に迷惑かけまくりじゃん。
けど、男には譲れないものが時にはあるのだ。学校生活において”友達”は最重要項目の一覧に名を列ねる。この機会を逃せば俺の友達作りはより困難を極めるだろう。舞い降りた千載一遇のチャンスを逃さばおくべきか、である。
「では、模擬戦開始！」
よし、ゴウゲン君が前に出るより先に攻撃しないと。巻き込むおそれがあるから、速攻で砂を対戦相手の地面一面に流動させる。
「……捕獲」
砂に驚き逃げようとする生徒達の足に砂を纏わせる。一度捕らえられれば蟻地獄のようにズルズルと砂に引き込む。まぁ、引き込むといっても埋めるわけじゃなくて砂を対戦相手の顔を残して体の全ての身動きをとれないように捕縛する。
けど砂が生徒をジワジワと侵食していく様子は砂に飲み込まれてくい様だ。
「うっあぁぁあーー!?!!」
「キャアアアーー!?!!」

「いやぁだぁーー!?!!」
「ママァーーー!?!!」
……あれ?これヤバくない?なんか絵面が完璧アウト感があるんだけど。ってか悲鳴がマジもんなのだが。涙と鼻水を恥ずかしげもなく垂らし叫び声を上げる生徒達。
それを静かに一切の感情の読み取れない鉄仮面で見る我愛羅くん……。
アウトオオオオーー!!
やべぇ、やり方間違えた。横のゴウゲンくんは俺をありえないものを見るような表情で見てるし、後ろの二人はアオサさんがキルルクくんにガタガタ震えながら抱きついている。そして先生までもがその光景に顔を青ざめている。
「そ、そこまで!試合終了!」
狼狽えなが先生が止めにはいる。
試合の勝敗は一応、俺達の勝ちと言うことになった。う、うん。やったぁ~……勝ったよ~……わぁぁい~……。……何故だろう全然嬉しくないどころか、虚しい。試合前より生徒と先生達と距離が空いたように思える。対戦相手達からはまるで人殺しの様な目で見られるし。
解せぬ。俺、頑張ったんだよ?誰か褒めてくれてもいいんじゃないかなぁ?
「……ゴウゲン」
「ひっ、なっなんだよ……!」
「……約束」
「えっ!?……あぁぁぁぁぁぁ!!」
腰を抜かして震えるゴウゲン君。なにそれ、演技凄い。えっ、演技じゃない?
「何でも言うこと聞くから、殺さないで……!!」
「……友達」
「……はっぁ!?」
「……俺と……友達になれ」

「あ、あぁ……？」
ヨシャァーー!!友達ゲットだぜ！何より、友達と言えた俺偉い！言うのメチャクチャ恥ずかしかった。いやぁ～、嬉しいなぁ。
「ヒッィ!!?」
おっと、思わず頬が緩んでしまった。

時刻は移り、爛々と輝くお月様が頭上に浮かび、砂漠の中に存在するため昼と夜の温度差の激しい外気が冷え込む。昼間の活気は失せ、歩く人の姿も疎らになった穏やかな宵の刻。
良い子は温か布団に包まれてスヤスヤお寝んねするのが、子供らしいだろう。出来れば俺もそうしたいと刹那に思うよ。
「クソッ！」
「このッ、化け物が！」
「退け、体制を整えろ！」
だがそう出来ないのが世の不条理だろうか。
こわーい、あんぶのひとに××されそうなの。ぼくがあらくんです。あるいていたら、クナイをなげられてぼくはとってもこまってます。ひとにめいわくこういはだめだよ。
はい、クナイに起爆札が付いていた事はこの際些細なこと、若しくはよくある事だ。月が綺麗だなぁと屋根を歩いていたら、やあ、殺しに来たよと覆面集団。
まぁ、何か嫌な気配を感じて人通りの少ない所に行くと案の定、襲われたと言う訳だよ奥さん。
もうー、我愛羅くんモテモテだね！アカデミーでは虫も寄り付かない程、引きに引いているのに。来るわ来るわ、暗部さん達。
「……砂針」

君達、そんなに暇なのかね？と問いたいね。
「ぐっぁ！」
「足が……！」
地面に暗部の人達が降りたところを狙い、瞬時に地面の砂を針状にする。何人かは逃れたが、回避が遅れた者は足をぐっさりと砂針が刺さる。
そして足を刺されバランスを崩し前や後に倒れようものなら、自身の体重と倒れた勢いで針が体を貫く。
仮に何とか健気に持ち堪えても、俺はその隙をみすみす見逃してあげるほど、お優しくはないのでね。地面から生える砂針を更に伸ばし、約人一人分に長くし足元から串刺しにする。
すれば、あらまぁともじゃないが、お見せできないモザイク処置必須である。
「……何故、俺を殺そうとする？」
「っ、そんなの決まっている！貴様が里を脅かす化け物だからだ!!」
「化け物……か……」
「あぁ、そうだ！分かったなら、大人しく里の為に死ね!!」
捕縛した暗部の方を、可愛く上目使いで質問してみたら予想通りの答えが返ってきた。罵倒するのはどうでも良いけどさ、捻りが無いよね。
毎回毎回、化け物化け物、死ね死ね、殺す殺す。
呪文か何かなのか？それを言えば目的が達成できる的な？何それ、願掛け？それとも、そう言えと命令されている……とも、考えたがこれとても演技には見えない。
寧ろ、これが演技なら忍の道から足を洗って、是非とも役者を目指して頂きたい。
「――ッ、風影様申し訳ありません！」
焦げ臭い臭いがすると思えば、砂を吹き飛ばし爆発が起きた。油断なく用心していたので砂で防げたが、爆発の後には砂煙が舞い、地面には焦げた痕跡ができ。そして人間だったモノの肉片が辺りに飛び散っている。

「……」

なんだこの死に方は、当て付けか何かか？夜叉丸も最後に起爆札を使い俺を巻き込もうとして死んだ。

皆、起爆札大好きか！まぁ、防げる攻撃をしてくれるから俺的はありがたいがね。

しかし、これを見ても特に感情が動かないのが我ながら結構ヤバイんじゃないだろうかと、考える。記憶が無い無いだから、前世の俺がどんなヤツだったの分からないし、知りようもない。

けど、もっとこう……込み上げる吐き気とか、罪悪感に苛まれる精神とか、暗部に対する憎しみとか、その他纏めた激情とか。そりゃあ、殺されかけたら寂しいし、止めて欲し、父様鬼畜いとは思うし、里の皆の態度も痛いし……けど、わりと”それだけ”なんだよね。

恨み憎しみに囚われて、里の全員に復讐してやるとは思わない。何もかもに絶望して、命を絶ちたいとも思わない。

自分の精神が異常なのは何となく察するけど、それが何？って感じだね。精神が凡凡の凡人だから、俺を取り巻く環境を端から見ているような気分なんだよね。殺したのは俺だし、その感触も確り手に染み込んでいる。見た風景も惨劇を作り出したのも俺だ。

たが、頑張りたくない、出来れば可能な限り楽をしたい、怠惰に生きたい。

それが俺だ。

全くもって、無気力人間。俺が我愛羅くんで良いのだろうか？合って無さすぎて笑えてくる。けどね、死ぬ気は今の所これまた、無い無いなんだよ。

だから――――死んでくれ。

『とか、昨日カッコつけていたが、起きろよ』
「俺にあるのはただの闇それだけだ……」
『まだ二日目だぞ』
「くッ、昨日の戦闘での傷が！」
『嘘つけ、傷一つ無いだろ』
守鶴が何か言ってくるが、俺には何も聞こえない。何故なら俺はいつも独りだからだ。孤独な俺に他者から与えられる癒しなどない。故に、耳の痛い言葉は聞こえないたら、聞こえない。
だが、今の俺の心の叫びを言おう。
「アカデミー行きたくない！」
『駄々っ子か！』
あぁ、行きたくない。砂分身で……駄目だ。即バレする未来しか見えない。

四塵〜休日、ボッチは実践訓練中〜

雲一つない快晴、鳥は空を悠々と飛び、子供が元気に廊下を駆けては先生方に怒られる。

そんな清々しき朝、皆様おはようございます。今日も最高にテンション駄々下がりの、表情筋が仕事をしない我愛羅くんです。

人に会えば先ずは挨拶から、基本ですよね。

「……」

はい、その基本が出来ない私なのでございます。

人がいない訳では無く、ただ単に俺のこの口が動いてくれないのだよ！それに挨拶をしようとも何故か、凄く避けられてする暇がない。

おぉ、神よ、私に試練を与えすぎではないか？いいんだよ、もうちょと減らしても。過度な試練の与え過ぎは精神に深刻なダメージを負わせますよ。

要するに試練よ、廃業しろ。

と、何時もならアカデミーに行けば思うところだが、今日は素晴らしきかな、休日である！

嫌な目で見てくる先生も、俺の心のゲージを確実に削っていく女子も、何故か目が会う度にヒィッと独特の言葉を発する友人のゴウゲン君もいない。

本当何で？俺、ゴウゲン君に悪いことしたかなぁ？今度、友情の証として何か贈ろう。きっと仲良くならる筈だ。兵糧丸じゃありきたりだし……皆があげる物じゃ印象に残らない……。

俺の自作の、起爆札……毒煙玉……貴重な毒草とかどうだろう？

まぁ、それはそれと置いといて今日は修行である。毎日やっている体術強化、独り組手に独り筋トレに加え術の研究をする。

俺の攻撃手段と言えば、”砂”。アニメオリジナルで武器の指南とか、体術を教わっている場面があったが全てナルトに会って性格が改変した後だ。それに漫画じゃ一回も我愛羅くんが砂以外の攻撃をした事はない。まぁ、そんだけ砂が強いって事何だろうけど、なんか味

気ないよね。
砂と思わせて、実は～っ的なヤツやってみたい。で、俺が砂以外の武器で考えて思った事は、砂系なら大体いけるんじゃねぇ？と言う疑問だ。前風影の砂鉄、現風影こと父様の砂金。
我愛羅くんが普段瓢箪に入れている砂は自身のチャクラを練り込んで操る為、そこいらの砂を使うよりも早く操作できる。慣れた武器は使いやすいと言った感じだ。それで俺が思ったのは砂と同じように砂鉄や砂金にチャクラを流し込めば操れるのではないか？だ。
結果、「そんなに人生甘くない」である。
動かすことは出来たが、とてもじゃないが実戦では使えない。俺自身が慣れてないのもあるが、メッチャ重いし遅いのだ。
だが、結構さっさと解決策は思い付いた。普段流し込んでいる倍のチャクラを練り込めば実戦で使える速さになる。
ただ、チャクラをかなり消費するから、人柱力であるチャクラの多い俺じゃないと直ぐに枯渇する。あと、そこら辺にある砂と違って砂鉄とか砂金は地中を掘り進めて探さないと見つからない。
敵と戦闘しながらそれをするのは、大分疲れる。なのであまりやりたくない為、戦闘中の補給は見込めない。そうまでして、砂鉄と砂金を使うよりも質より量の砂の方が便利だ。
しかし、ロマンには逆らえないのが男しての悲しいさがだ。少量であれば問題なく扱える、なら使おう！砂金は正直、金銭としての価値しかあまり見出だせないから一先ず無視するとして。砂鉄は硬度も攻撃力も砂より高いし、絶対戦力増加になる。
前風影のように大量に砂鉄の大盤振る舞いは出来ないが、クナイや刀等の武器の形状にすることは出来る。元が砂鉄だからどうやっても真っ黒だが、形を自在に変えれる武器だと思えば中々に良いのではないだろうか。
砂でもやろうと思えば出来るが、砂は攻撃を吸収するのに向いている。何より刀一本分ぐらいならチャクラも殆ど使わない、俺に優しい低燃費だ。
けど、実際に使ってみないと性能は分からない。

「と、言うわけで――いざ実践！カモン、守鶴たん」
『守鶴たん言うなァ！気色悪い！』
俺の砂分身に意思だけ憑依した守鶴との実践練習開始である。
ん？守鶴に乗っ取られてる？違う違う、守鶴たんが俺を乗っ取れる事が出来るなら、俺が意識して分身体の体をあけ渡せば操れるんじゃないか、と思ってね。案の定、可能でした。
わーい、これで俺独りぼっちじゃないよ！そこかよ、等の意見はお受けしておりません。だって寂しいじゃん！そりゃあ、声は聞こえるけど会って話したいじゃん！
けど、自分の姿で守鶴たんの口調はなんか……いや、決して……守鶴が嫌な訳では無いよ？けどさぁ、ほらキャラってあるしさぁ……我愛羅くんは大声で怒鳴ったりしないし……。私にも色々あんのよ……わかっておくれやす……。
そんな超絶個人的な意見で、守鶴は別の姿をとってもらっている。
薄金から毛先にかけて黄金色の髪に、縦にバッテンが入ったお月様の様な瞳に本来白目の部分が黒く染まった目。我愛羅くん同様に白い肌をした同じ背丈の目付きの悪い少年が立っている。はい、こちら守鶴たんでございます。
えっ？女の子じゃないのか？何言ってんの？ベースは我愛羅くんだよ。もう、やっだなぁー美少女のわけないじゃん。現実はそんなに希望に満ちてないんだよ、知ってた？
『おい、俺様はお前のお遊びに付き合ってやる義理なんってねぇーぞ！』
「まぁまぁまぁまぁ、そう言わないで。後で何か好きモノ作ってあげるから」
『……ほ、本当だろうなァ……嘘吐けばその口切り裂くぞ』
「本当本当、マジマジだよ」
夜叉丸がいなくなって本格的に絶賛独り暮らしだから、家事洗濯料理等の女子力が鰻登りです。それにより、守鶴たんの扱いがどんどん楽になっていくから、悪いことではない。
『しゃーねぇ、めんどくせぇがこの俺様が相手してやる。感謝しろよ』

「はい、ありがとうございます。守鶴たん」
『っ……、だからその「たん」止めろっってんだろ！耳にクソでも詰まってんのかァ!?』
「えー、可愛いのに……」
　真面目にお礼を言ったら、守鶴が一瞬固まってから怒鳴りだした。相変わらず短気だなぁ。
　それでも、俺の修行の相手をしてくれる守鶴はマジ感謝してもしきれない。それと、「たん」は付けた方が親しみやすく成るかと思ったからなんだが……馬鹿騒ぎしてるみたいで楽しいから、もう暫く「たん」呼びさせて貰おう。
『もう、うぜぇ！』
「わっ、不意討ちは卑怯じゃないかぁ」
『知るか!!』
　地面から伸びる砂の手から逃れる為に空中に跳べば、手裏剣を模様した砂手裏剣が俺を襲う。それを砂鉄できたクナイで弾き、着地すると同時に襲いかかってくる砂に、クナイに起爆札を付け投げる。
　そんなモノが砂に効く訳がなく、直ぐにまた攻撃が来るが動きを一瞬止められれば十分。普通なら後退する所だが、中距離から遠距離を得意とする砂相手にそれは愚策だ。
　水遁や雷遁が扱えればそれでもいいが、生憎俺の性質は風と土なので無理。なら、近づいて接近戦に持ち込むしかない。
　起爆札の爆発により起きた煙に紛れ、守鶴に一気に距離を詰める。勿論、そう易々と近づかせてくれる訳がなく、地面が砂針と化す。針坪マッサージと言うが、これはそんなレベルじゃない。
　だが、足を止めれば守鶴攻略は不可能。どうする……
　あっ、纏わせればいいんだ。
「砂鉄を足に……」
　毎日履いている忍の靴で踏めば間違いなく、足が！足が！になる。なら、砂鉄を靴に纏わせば――あら不思議、砂針の上も痛くありません。
　ちょと重いけど、普段背負っているあのくそでかくて重たい瓢箪に

比べれば全然軽い。
とっ、チャクラで足を強化し地面を蹴る。その勢いのまま俺の周りをフワフワ浮遊している砂鉄を刀状に変形させ、思いっきり振りかぶる。
が、ザッと砂の盾でガードされ守鶴には届かず、空中で停止した所を吹き飛ばされ再び距離をとられる。
「んーー、かったいなぁ……」
『なんだ、もう止めるかのか？』
「いっんや、もうちょと付き合ってよ」
とは、言ったものの流石に使い慣れてない砂鉄で守鶴の防御を掻い潜り、攻撃を与えるのは今のところかなり厳しい。砂を使えればと……考えてしまうが、それではわざわざ守鶴に相手をしてもらう実践の意味がない。
なので、日が暮れ辺りが暗くなってくるまで俺は守鶴と修行を続けた。

『なぁ……もういいんじゃねぇか？』
「ま……まだ、もう……ちょと……お願い」
『っても、お前息切れ切れでチャクラも殆どねぇーだろ』
砂を使わないで戦った為、体にわりと切り傷が出来てしまった。だが、人柱力持ち前の回復能力で多分寝れば治るだろう。だと言うのに守鶴はもう、止めようと言ってくる。
もう、守鶴たんは心配症だなぁー、と茶化そうと声を出そうと思ったが出た言葉は違った。
「へ、平気……平気……全然大丈……夫……」
『……お前――』
ん？何だか守鶴が霞んで見えてきた。声も聞こえるが頭に入って

来ない。手足も震えて、凄く疲れている気がする。
あれ？もしかして俺、結構ヤバい……？
そう、認識したら体が前に倒れ、目を見開いた守鶴が途切れかけの意識の中見えた。

五塵～守鶴心、我知らず～

――何で、そこまでする必要があんっだよ……。

俺様はアイツが産まれた時から知っている。凡そ、アイツの親や兄弟よりも、長く長く側にいる。まぁ、忌々しい封印術のせいで離れられねぇと言った方が適切だが、これでもアイツの事は分かっているつもりだった。

いや、知ろうとして知った訳ではなく半強制的にアイツを俺様は知った。じゃなければ、大嫌いな人間なんぞの事を進んで知りたいと何って思うかよ。

俺様は人間が大嫌いだ。

そこに例外は無い、比較的口を聞いてやった奴もいるが、それまでだ。大嫌いな事に変わりはねぇ。大体、俺様を封印した人間を好きになれと、言う方が可笑しい。ここから出ることが出来たなら、暴れまわって、食い殺して、絶望と俺様を封印した事を人間どもに後悔させてさる。これは決定事項だ。変える気なんって微塵もねぇ。

そんで、アイツは人柱力。影でこそこそ泣いては、俺様の力を扱えず人を傷つけてしまったと、また泣くクソ餓鬼。それが、世話役の男に裏切れて殺されかけて、今までの人柱力の様に人を憎むようになったと思った。思ったが、裏切れたショックで暴走したその次の日アイツは……

『やぁ、守鶴さん。こんにちは、今日はいい天気だね』

いよいよ、頭がイカれたか?と俺様は思った。会えば怖がり泣きじゃくっていた、筈のヤツが次の日はヘラっした態度で挨拶してきやがった。どんな心変わりをしてもこうは成らねぇだろう。

だが、まぁいい。どうせ、無視しとけば直ぐに失せる。そう、俺様は考えたので関わるなと狸寝入りをしたが、アイツは……

『守鶴さん、暇なのでしりとりをしよう!』

『……』

『守鶴さん、今日雨が降ったんだよ！凄いね！お陰でビショビショになったちゃったよ』
『……』
『守鶴たん、今日父様にメッチャ睨まれたよ』
『……』
答える気が無いことがアイツには分からねぇのか？何回も何回も話しかけてウゼェが、答えてやるのも癪で返答してやる気なってなかった。
だが、ちょと待って……
『誰が「たん」だ！気色悪い事言ってんじゃねぇー!!殺すぞ、餓鬼!!』
と、思わず反応してしまった。だが、この俺様をふざけた呼び方で呼ぶヤツをそのまま流してやる程俺様はお優しくない。だから、アイツが恐怖し泣き震えるように睨みつけてやった。
これで、アイツも大人しく引き下がるだろうと……だと言うのに、無表情の癖に『やっと話してくれた』と嬉しそうにしやがったんだ。
何だコイツは……本当に頭のネジが飛んでやがる。
それからも、アイツは性懲りもなく毎日毎日俺様の所に来る。意味がわかんねぇ、俺様を怖がるでもなく話しかけてくるアイツの考えが読めねぇ。俺様に取り入って利用しようとしてっんのか？
『利用？……ッ、クッハハハ！何それ！俺が君を利用!?無理無理、出来っこないって！クッフフ……守鶴たん、冗談上手いね！あー、お腹痛い痛い。フッフフ……』
真底可笑しげにアイツは鉄仮面を崩し、地面を叩き踞って肩を震わせ笑った。何だその笑い方はと思うよりも、俺様の思考は水を浴びせられた様に固まった。
とても嘘を言っている様には見えねぇ、ならコイツは何故俺様に関わろうとする。利用する気もなく、俺様に話しかけて何になる。
『クソ餓鬼……テメェ何で俺様に話しかけてくる』
『ん？何でって……そんなの決まってるじゃないか』
【君】と【友達】に成りたいからだよ、守鶴。アイツはまるで当然と

ばかりに俺様にそう言った。
本当、心底可笑しい、馬鹿げてる、何で人間のお前が俺様と言葉が喉の奥で溢れで出そうになったが出たか言葉は……
『お前、本当にそう思ってんのかよ……』
『無論さぁ、じゃなければ俺の貴重な睡眠時間を削ってまでここに来ないって』
貴重と言う割には普段寝まくってるだろ、と言いたいが俺様は一言、「そうかよ」と言った。それ以上言葉が出てこなかったからだ。
何だよ、俺様、ほだされってんじゃねぇか？馬鹿だろ、相手はあの憎い人間だぜ？餓鬼の戯れ言だ構うことはねぇだろ？あぁ、そうだその筈だろ？
そう自身に問いかけては自問自答を繰り返す間も、アイツは性懲りもなく俺様に毎日飽きもせずくだらねぇ事を話しかけてくる。
「空が青いねぇ～、絶好の昼寝日和だと思わないかい？」
『知るか、昨日もそう言ってたじゃねぇか』
「昨日は昨日、今日は今日の眠気が訪れると、よく言うじゃないか」
『言わねぇーよ』
ハッ、めんどくせぇ、何でこの俺様がこんな餓鬼の言葉に振り回されねぇといけねぇんだ。もう知るかよ、勝手にしろ。暇潰しだ、そうだコイツは暇潰しだ。
胸糞わりぃ、封印が破れるまでの、暇潰しに話をしてやる。有り難く思いやがれ、クソ餓鬼。この俺様が話相手になってやる。
と、俺様にこう思わせるクソ生意気な理解出来ねぇ餓鬼だが、もっと理解出来ねぇのがアイツの修業方だ。チャクラが切れてぶっ倒れるまで、何らかの修業をしている。俺様がいてもとから多い人柱力のチャクラが枯渇するまでだ。
挙げ句には、自身の分身とはいえ俺様に体を乗っ取られる事を許しやがった。一周回ってコイツ、馬鹿なんじゃ無いかと最近思う様になった。
『お前、馬鹿だ、馬鹿』
「えっ？急に何？……まぁ、そんなに頭良いとは思ってないけど……」

『チッ』
「何で、舌打ち!?俺何か君の気に障ることしたかい？」
あー、うるせぇ。何で、ソコまでして強く成ろうとすんだよ。俺様の砂があればお前が傷付く事なんかねぇーだろが。なのに、いつ暗殺者が来るか分からねぇ状況で、フラフラになってまで修業するか？
馬鹿以外に言いようがねぇ。料理を作るのを条件に修業手伝ってやったのに、ぶっ倒れやかって。俺様、料理何か出来ねぇぞ。……クソ……仕方ねぇから、起きるまでは守ってやるが、勘違いすんじゃねぇぞ。あくまで飯の為だ、テメェの為何かじゃ微塵もねぇからな。
だから――さっさと目を覚ませよ。我愛羅。